随　　想

歴史探訪 PartⅡ-⑪

江戸川木材工業株式会社
顧問　清　水　太　郎

近代史の講義に通い始めた時、受講の動機について、「自分は江東区にある企業に50年勤務しました。深川は江戸時代から栄えていて伝統文化の宝庫でもありましたが、如何にして文化が醸成されたのか知り度い。」と書いて出しました。教授は一目見て、「小名木川については？」と一言仰いました。

数週間後、古文書と『正保国絵図』(武蔵国部分)のコピーを渡し、家康が小田原征伐後、江戸へ移封され、関ヶ原の戦(1600)、江戸幕府開幕、征夷大将軍(1603)となり、大坂の陣(1615)を経て、盤石の体制を築く経緯を熱く語って下さいました。

関ヶ原の戦に圧勝したとは云え、大坂城には淀君、秀頼親子が居り、豊臣恩顧の大名は九州の島津、中国の毛利、四国の長宗我部、北陸の前田、信州の真田、東北の伊達といずれも健在でありました。

家康は先ず江戸の入江を埋め立て、道三堀を開削、隅田川の東に小名木川を掘り、中川の東は新川を経由して江戸川へ繋げました。

次回の講義の冒頭、教授は「前回の感想を募った処、小名木川に関するコメントがなかったのは残念でありました。」と仰いました。

これは将に私に対する厳しい指摘のように思われ、講義の合い間、休憩と暇つぶしで寄ったブックオフで『日本史の謎は(地形)で解ける』と云うPHP文庫(竹村公太郎著)を掘り出しました。

竹村氏は学卒後、建設省のダム現場に配属され、鬼怒川ダムを皮切りに、会津、丹沢ダム等を転々として、20年後、長良川河口堰問題のチームに投入され、自然破壊と非難された市民団体、マスコミの対応をされていました。その際、説明のなかで、「長良川流域の人々の生命と財産を守る」という言葉を使っていたが、これが上から目線に聞こえ、こじれる原因である、と著名な社会評論家に指摘されました。これを反省して自分の得意分野である地形と気象によって説明すればよいことが解り、その後日本史の謎を解く鍵となったそうです。そのうちの一つが小名木川です。

今の定説では小名木川は「行徳から江戸へ塩を運ぶ運河でありました。行徳とは今でも高級な塩の代名詞として知られておりました。」

小名木川の開削は1590年に開始されています。これは家康がまだ残っている北条氏一党を押さえる為、関東一円を水路網で覆う為に必要不可欠なこと

図1　江戸初期の河川及び海岸

出典:鈴木理生『幻の江戸百年』筑摩書房　作図:竹村・松野

図2　江戸初期の小名木川と江戸湾

作図:竹村・松野

でありました。竹村氏が入手したのが、鈴木理生著『東京の地理がわかる事典』にある江戸初期の地図で、これによって小名木川は、徳川勢は一直線に関東一円に立ち向かう経路であることが解ります。

本能寺の変で、大坂に居た家康が窮地から脱出する為に効のあった摂津佃の漁師33人を呼んで、水路を北上して旧北条勢に立ち向かう船の操縦を委ね、山越えを助けた服部半蔵に江戸城の警護を委ねました。

歌川広重『名所江戸百景』のなかに「小奈木川五本まつ」があります。これを見ますと直線である筈の小名木川がカーブを描いており、開削当初、関東制覇に向かう軍船が行く緊張感は微塵もありません。

私も廣重の東海道五十三次の浮世絵を見て東海道中にのめり込んだこともありました。

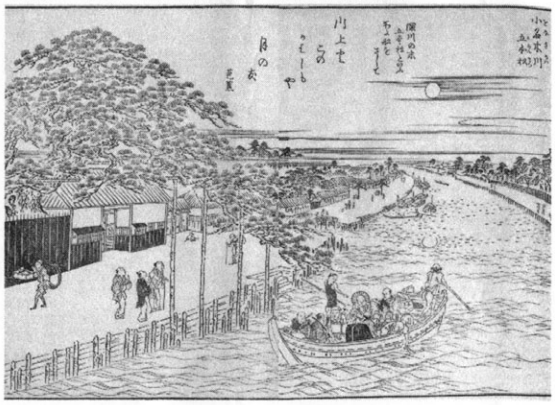
広重の画法には、箱根、薩多峠に見られるようなデフォルメがあります。しかし、白須賀のように描いた地点からの構図が充分ダイナミックである為に、跨張がない作品もあります。これに因んだ「雲助が海を跨げる汐見坂」という川柳もあります。

広重は平和な時代の小名木川はカーブが相応しいと考えたに違いない。

写真１　『名所江戸百景』《小奈木川五本まつ》（歌川広重）

資料提供：三菱東京ＵＦＪ銀行貨幣資料館

写真２　『江戸名所図会』《小名木川・五本松》



所蔵：江戸東京博物館　Image：東京都歴史文化財団イメージアーカイブ